

フレーベル教育学における媒介学校論に関する一考察

——幼稚園と学校との連携をめぐる——

豊 泉 清 浩

キーワード：フレーベル、幼稚園、媒介学校、学習学校、媒介の法則

はじめに

- 1 フレーベルの学校教育学に見られる媒介学校論
 - 2 晩年の媒介学校論
 - 3 媒介学校論の思想的背景
- むすび

はじめに

フレーベル (F.W.A.Fröbel, 1782-1852) の教育学は、学校構想から幼稚園へと展開していったが、常に家庭と学校の結合という思想が根底にある。したがって、家庭生活そのものである幼稚園教育と学校での教授とをいかに接続すべきかという思考が、学校構想の中に見られる。とりわけ晩年の1852年に、幼稚園と純粋な本来の学習学校とを結びつける「媒介学校あるいは予備学校 (Vermittelungs-oder Vorschule)」¹ の構想が見られる。

本稿では、まずフレーベルの学校教育学に見られる媒介学校論について検討し、次にフレーベルが1852年5月25日にマリエンタールで書いた、一女子生徒エンマに宛てた書簡²の中で展開している媒介学校論について考察し、それから媒介学校論の思想的背景について考究する。フレーベルの学校教育学は、カイルハウでの「基礎づける教授 (der begründende Unterricht)」ないし「基礎的教授 (der fundamentale Unterricht)」を継承しているもので、基本

的に媒介学校論の域を出なかったのではないかということ、媒介学校論は「媒介の法則（Vermittlungsgesetz）」に基づいていること、媒介学校論には母性と父性が関係しているのではないかということ、これらのことについて検討していく。それゆえ本稿の目的は、フレーベルにおける媒介学校論が、彼の教育学においていかなる意味を持っているかについて考察することにある。

1 フレーベルの学校教育学に見られる媒介学校論

フレーベルは、『人間の教育』において、あとの方の三分の二を「生徒としての人間」について論述している。その際、「生徒としての人間」の教科論に関して、家庭と学校の結合、家庭生活と学校生活の結合という観点から考察している。『人間の教育』における学校概念は、あくまでも家庭生活の延長上にあり、学校の教師も教育の専門家というだけではなく、父親でもよいと考えられている。そのため、家庭と学校の結合という前提の上に、学校が成り立つのである。

この『人間の教育』における家庭と学校の結合という思想は、フレーベルの媒介学校論を考察する上で非常に重要な意味を持っている。とりわけ、家庭と学校の結合によって制約される個々の教科は、注目に値する。まず、フレーベルは、学校教授の内容の第一段階、すなわち少年初期の子どものための基礎となる教授対象として、宗教、身体の訓練、自然および外界の考察、唱歌、言葉の練習、空間的表現の練習、図画、色の把握、遊戯、お話、遠足などを挙げている³。また第二段階、すなわち少年期の後期に属する教授対象として、数、空間、形、話し方、書き方、読み方を挙げている⁴。この点に関して、岩崎次男は次のように述べている。「第一段の教科は、子どもの自主的・主体的活動からなる生活教科的なものであり、第二段のそれは本格的な学校教科的なものであるが、それらは第一段の『基礎的教科』から現れてくるべきものとされた。ところで、かかる学校は、フレーベルによって晩年に提唱される、幼稚園から本来の学習学校への移行段階をなす、『媒介学校』（Vermittlungsschule）である、と見てさしつかえないであろう。」⁵ そうだと

すれば、『人間の教育』の後半をしめる学校教授論は、この媒介学校論である。われわれは、これから、媒介学校の具体的内容をほぼ完全に推察することができる⁶と。

『人間の教育』における学校教授論の中でも、「外界の観察」は、特に重要なものの一つである。外界の観察は、その最初の理解において媒介学校の主要な対象をなすものである、とフレーベルは指摘し、自分の『人間の教育』を引き合いに出している⁷。この外界の観察は、極めて注目すべきやり方で、同時に人間の活動や職業の構成に導き入れ、また人間の発達の歴史にすら導き入れるものである。同様に外界の観察は、注目すべきことには、さらに人間の外界および内界が聞くことのでき、また文字を通して見るることのできる表現としての「言語分野の直観と理解」へ導く⁸。

さて、フレーベルは、1826年以降のカイルハウ学園の危機的状況を打開しようと、学園をさらにヘルバに設立するための計画を立てた。この計画は実現されなかったが、1829年初春、「マイニンゲンのそばのヘルバにおける国民教育施設および同時にそれと結びつけられた、3－6歳の孤児のための保育と発達の施設に関する公告（Anzeige von der Volkserziehungsanstalt in Helba, ohnweit Meiningen, und von der zugleich damit verbundenen Pflege=und Entwicklungsanstalt für 3－6 jähr. Waisen）」が出され、これが、「ヘルバ・プラン」と呼ばれるものである。この計画は、7歳から14歳までのすべての子どもを対象とする、国民教育施設の構想である。この教育施設は、「基礎づける学園（begründende Anstalt）」と呼ばれる⁹。また、「ヘルバ・プラン」で注目すべきことは、国民教育施設に、母親および3歳から7歳までの男女の子どものための「保育と発達の施設（Pflege=und Entwicklungsanstalt）」¹⁰が付設されるべきことが主張されている点である。この「保育と発達の施設」は、当時の幼児学校や託児所とは異なる、就学前の保育と教育を目標とする幼児教育施設と考えられ、この意味において、「ヘルバ・プラン」には、のちの幼稚園につながる構想が内包されていると見ることができる。

ハイランド（H.Heiland, 1937-）によれば、基本的にヘルバの計画も、カイ

ルハウの「基礎づける教授」を提供すべきものであることが明らかである¹¹。ハイラントは、ヘルバの教授領域の一覧表から、「基礎づける教授」のための特別な教授領域を抜き出すと、本質的に『人間の教育』の教科課程が問題であることが明らかになる、と指摘している¹²。ハイラントによれば、「ヘルバ・プラン」は、『人間の教育』において少年初期の教育のために、宗教、自然、数学、言語、芸術という5つの領域として示された「基礎的教授」と、その後の「継続する教授（der weiterführende Unterricht）」とが混在する形態となっている¹³。その意味では、「ヘルバ・プラン」における国民教育施設での教授は、カイルハウの「基礎づける教授」という媒介学校的な教授を基礎に、本来の学習学校の教授をも加味して構成されていたと考えることができよう。ハイラントによれば、「ヘルバ・プラン」は、就学前の年齢において保育施設とともに始まり、教育の継続のための制度とともに成人を終え、全体的な低学年と高学年の領域を包括する、諸段階における学校諸形式の有機的組織、という構想である¹⁴。

ところで、フレーベルは、1831年7月から1836年5月までの約5年間、スイスで活動している。この時期に、フレーベルは、主にブルクドルフの孤児院での指導を通して、学校組織計画である「ブルクドルフの孤児院における初等学校の計画（Plan der Elementarschule im Waisenhouse zu Bruggdorf）」、いわゆる「ブルクドルフ・プラン」を発表した。

ブルクドルフの孤児院における初等学校の計画は、まず最初に三つに区分される¹⁵。

第一部は4歳から6歳までの子どもたち。

第二部は6歳から8歳までの子どもたち。

第三部は8歳から10歳までの子どもたち。

第四部はそれまでの諸部分の総合であり、意識やこの部分にふさわしい自覚的な生活における統一であり、それは12歳までである。

ハイラントによれば、「ブルクドルフ・プラン」は、外見上はカイルハウの「基礎的教授」を繰り返しているだけであるが、基礎学校の4－6歳の第一学

級は、のちの幼稚園の前形式の性質を表わしている¹⁶。この学校制度の構想には、家庭生活と学校生活を子どもの独自の内面的な生活によって、無理なく媒介するものとして最晩年の1852年に展開される「媒介学校」の考えが見られる¹⁷。

このように、『人間の教育』における学校教授論が、基本的に媒介学校論であるとの前提に立てば、カイルハウの「基礎づける教授」を継承している「ヘルバ・プラン」および「ブルクドルフ・プラン」における学校教授論も、本質的に媒介学校の性格を強く持つものであったと推察される。

2 晩年の媒介学校論

フレーベルは、前述した書簡の中で、まず人間の発達段階について言及している¹⁸。人間の発達段階における最初の段階である乳児の段階は、主に母親が世話をする時期である。この段階は、特に子どもの身体を力づけ強化するために主として幼児の保育が行なわれる第一期と、身体、四肢および感覚を注意深く発達させ使用させる第二期とに分けられる。

第二の段階は、家庭または小児部屋の段階である。子どもは、自分に開放される部屋の空間によって、身体、四肢および感覚をまったく自発的にかつ自由自在に使用するまでになり、また特に言語能力の完全な発達にまで達する。乳児と小児部屋の段階が幼児期の生活の最初の主要な段階と見なされるとすれば、幼稚園は幼児期の生活の第二の主要な段階である¹⁹。幼稚園に入ることによって、子どもはさまざまな新しい生活関係に入る。このことは、幼稚園保母によって注意深くかつ思慮深く考察されるべきである。

幼稚園に入ることによって、子どもは、まず多数の中の個人として仲間に向かい合う。しかし同時に、全体の一員にもなる。ここにまず、幼稚園の人間陶治的なものがある²⁰。第二に、子どもは多数の対象、事実、事物に直面する。これらの対象、事実および事物は、子どもにとって知覚や直観等々の対象となるとともに、創造的意志活動の対象、したがって子どもの創造的力およびその力の成果の認識のための手段ともなり、再び事実と行動そのもの

を通じて、まず事物等々そのもの、第二にそれらの相関関係、第三にそれらの成り立ちや発展の仕事、第四にそれらのその後の働きの継続を子どもに直接に知るようにする。

幼稚園保母は、子どもを第三の主要な段階、すなわち媒介学校に移す前に、このことすべてを真に明瞭に洞察しかつ直観していなければならない。幼稚園においては、直観、理解、行動、言葉による正しい表示、行動による正しい表示だけが問題であるが、対象からはぎとられた認識や知識はまだ問題ではない²¹。対象と知識、直観と言葉とは、まだしばしば、密接に合一したものである。したがって幼稚園保母は、幼稚園のこの陶冶段階を極めてはっきりと限定された段階としてしっかりと把握していなければならない。この段階は抽象的で純粋な認識、抽象的で独立的な思考をまた完全に排除する。

フレーベルによれば、幼稚園の確かで明瞭な成果は、対象と、その対象の特性や関係や成り立ちや発展、その対象の生活とのさまざまな関連などの鋭い確かな明瞭な理解と直観である²²。これらすべてが、厳密に表示された言葉に結びつけられる。まず自由な創造活動を通じて作り出された形態や形象が、生活、認識と洞察、感情、美などの形式として表示される。ここでは、内的に統一したもののおよび存在するものが外的な多様性の中に表われる。こうして、子どもは、内的な統一に安らいで合法的な展開を通じて現われてくる多様性の真の認識、特に直観に達する。つまりフレーベルは、子どもは、一つの統一、つまり神から出発して、多様性や対立や媒介を通じて、再び統一、つまり神との合一へ達すると考える²³。

フレーベルによれば、少年の気晴らしの行動を防ぐとともに、発展的・創造的・造形的活動の衝動を目覚めさせる発達法則が、幼稚園の与える唯一のものである²⁴。この発展的活動の成果は、不透明なものが透明になり、見えないものが見えるようになることである。子どもは、両親の行為の中に彼らの愛を認識する。「神の統一的な本質と愛は透明な自然のなかでわれわれに明らかになります。棒並べ——板組み——紐むすび——豆細工は、とくに空洞の、空虚な平面から空洞の、空虚な立体、すなわち立方体・八面体・四面体等々、

および立方体と球におけるそれらの関連および内在にまで高まりつつ、この不透明なものの透明化へ導きます。」²⁵ また、正方形や三角形を並べることは、形の内容に対する関係あるいは形態や形の大きさに対する関係の極めて重要な知識へ導く。

フレーベルによれば、幼稚園の指導全体は、まったく単純な数学的証明にのみ基づいている²⁶。幼稚園が開拓し、かつそれらの基本的な一般性が証明されうるなお二つの主要な生命直観がある。これは、多数・多量・数の単一に対する関係並びにそれら相互の関係および表示の事実に対する関係である。後者の場合は、一つは言葉の事実に対する関係、もう一つは記号の事実に対する関係という二重の関係としてある。

フレーベルは、対象を言葉や記号によって模写することについて言及する。対象を言葉によって模写することは、幼稚園では単に若干の名称の表現までに留まる。そのことについては、「いかにしてリナは人や事物を通じて読み方を覚えるか」という論文が十分な手引きを与えてくれる、と彼は指摘している²⁷。また、図画、すなわち記号による対象の表現については、ほとんど幼稚園の仕事ではない、とフレーベルは考えている²⁸。なぜなら、子どもの指はまだあまりにも弱いからである。石筆で円を描くことと同様に、棒並べは一面ではこの図画の代りをしている、と彼は指摘する。これは、単純な花や葉を形造るところまで行なうことができる。

フレーベルは、子どもの指がまだ弱いという理由から、図画は、書き方とともに主として媒介学校の仕事に属すると考える²⁹。色彩練習や本来の唱歌練習も同様である。幼稚園における唱歌はそのための準備にすぎない。

さらに、フレーベルは、幼稚園で行なわれることに関して、次のように述べている。「さらにあなたは、まず運動遊戯を通じて、ついで子どもたちの個人の庭や共同の庭の世話を通じて、それらによって子どものうちに目覚まされ養われる個人的な自己感情と生命感情を通じて、およびこの感情の高まりと同時にあたえられ目覚まされるところの、ひとりの（父性的な）生命授与者と彼の生命保育の感情——その感情の根拠として、子どもたちは善良であ

ることを欲しているといういわば保証人イエスの名前が子どもに対してあげられますが——その感情の予感を通じて、子どもを生命そのもののなかへ導き入れる仕事をこれにつけ加えなさい。」³⁰つまりフレーベルは、運動遊戯や子どもたちの個人の庭や共同の庭の世話によって、子どもの内に目覚まされ養われる個人的な自己感情と生命感情、またこの感情の高まりと同時に与えられ目覚まされる神と神の生命保育の感情の予感を通じて、子どもを生命そのものの中へ導き入れる仕事が重要であるといっているのである。

フレーベルは、媒介学校とは何かということについて次のように述べている。「媒介学校というその名称が次のことをはっきり物語っています。すなわち、この学校が幼稚園から本来の学習学校への結び目、移行段階をなすものであるということ、またこの学校が幼稚園の陶冶から、幼稚園の本質から出発して、本来の学習学校へ、この学校の本質とこの本質の要求とに合致し、かつしたがう、子どもの正しい指導へ導きながら、こうして両者の本質を自らのなかに含み統合するものであるということであります。」³¹つまり媒介学校とは、幼稚園から本来の学習学校への移行段階であり、両者をつなぎ、両者の本質を統合するものと位置づけられる。

フレーベルは、幼稚園の本質と本来の学習学校の本質とを、次のように簡潔に特徴づけている。「幼稚園にあつては子ども、彼の本質およびその強化・力づけ・発達・開発・教育がとくに主要な問題であるが、学習学校にあつては全く逆である、と。ここでは、対象、その本質、およびその特性や関係の認識・直観および理解、それらの表示等々が主要な問題ですが、それによってもたらされる子どもたちの形成は第二義的なもの、いわば副次的なものの、偶然的なものであります。子どもに対して対象・事実・事物をその正しい本質において、その真の特性および明瞭な関係において認識するように要求することによって、子どももまた再びしっかりつかまれます。しかし直観を通じての対象の正しい理解や知識だけが主要な問題であります。学習学校にあつては思考を通じての対象の理解、内的な表象、いわば身体の着物を脱ぐこと（抽象）が主要な問題であります。」³²幼稚園では、直観による認識に

重きが置かれるのに対して、学習学校では思考による理解が求められる。この点に関してフレーベルは、端的に、「したがって、媒介学校は現実および事物の直観から抽象的・思考的な理解への移行段階をなします」³³と述べている。

フレーベルは、媒介学校の本質やそこでの指導は、幼稚園の本質および細目についての厳密な知識と、学習学校とその対象・本質・要求についての一般的な知識を前提としていてはわからないと考えている。それゆえフレーベルは、予備学校あるいは媒介学校の完全な指導を自己の任務とする者は、この指導に真に完全さと完璧さが要求される場合、少なくとも1年の養成課程を修了しなければならない、と主張する³⁴。つまり、フレーベルは、媒介学校の指導者は、独自の養成課程の修了者であることを前提としているのである。

媒介学校は、事実や現象、幼稚園における直観を引き継ぐが、特殊なもの、個別的なものの考察に対して、知的な理解と思考形式を与える³⁵。このことを、フレーベルは、数そのものとは異なる数字への移行などを例に挙げて説明している。媒介学校は、特に根本的に算数、つまり本物の計算に導き入れるが、空間や形態や大きさに関する知識や学科にも導き入れる。

フレーベルは、『人間の教育』における学校の教科としての数、「日曜誌」の第五恩物のための石版刷り、あるいはさまざまな三角形でつくる認識の形式、および豆細工は、幼稚園から媒介学校を通過して学習学校、思考学校および教える学校（Lern-, Denk-und Lehrschule）に至る最も重要な連絡および移行の手段であると考えている³⁶。それゆえ、この学習学校を、「教授学校（Unterrichtsschule）」と名づけたい、とフレーベルは主張している³⁷。

フレーベルは、「幼稚園陶冶の要石であったものが、いまや予備学校、すなわち媒介学校の出発点となり、最初の段階となります。特殊の、個々の、かつ事物の直観が思考の出発点となり、最初の段階となります」³⁸と述べている。つまりそれは次のことを意味する。「統一に個性が」、「個性に多様性が」、「外的なものに内的なものが」、「可視的なものに不可視的なものが」、「単一のものに多種多様なものが」、「単純なものに複雑なものが」、「丸いものに真直ぐなものが」、「運動に静止が」、「全体に部分が」、「統一的なものに分化した

ものが」、「安定しかつ静止している内的な存在に外的な現象・生成が」、「外的な並列に内的な関連が」、「外的な結合に内的な発展が」、「一時的な現象に永続的な作用が」、「単なる作用に生命が」、「生命に生動的なものが」、「生動的なものに悟性的なものが」、「悟性的なものに理性的なものが」、「無意識的なものに意識的なものが」、対立し、またその逆も同じである³⁹。

フレーベルは、媒介的なものとしてさらに次のようなものをつけ加えることができると考えている。それは、「無意識と意識化」、「意識化と意識」、「黙してはいるが語りかける形式と、語りかける、美しい言葉、雄弁な、聞こえる言葉」である⁴⁰。

子どもが、対立の法則および媒介の法則に関連する事物の直観と理解の能力を持つことが、幼稚園から媒介学校への移行の段階を示す、とフレーベルは考えている。無意識から意識化を通して意識へと発展することが、今や準備学校の課題である⁴¹。幼稚園の要石は、そのための最初の段階である。

媒介学校の本質および性格は、特殊的なものが一般性にまで、外的な個別直観が内的な全体理解にまで高められることによって、明確に特徴づけられる。この本質および性格は、媒介学校に次のような学科への導入を要求する⁴²。それは、「空間に関する学科」、「形に関する学科」、「数に関する学科」、「大きさに関する学科」、「言語と記号に関する学科と技術」、「外界の観察」、「言語分野の直観と理解」、「基礎的な唱歌ないし唱歌および唱歌の基礎的な練習」、「自然観察および自然科」、「植物学」、「地球の表面に関する学科、すなわち地誌」である。

フレーベルは、外界の観察、その中でも、植物界、特に樹木界の考察は、媒介学校の子どもにとって極めて重要であると考えている⁴³。樹木界の考察は、基礎的な媒介教授全体を示し、これを自らの内で極めて完全に完結している。したがって、それはまたすべてのものを原点および始点へ回帰させる。それはまた、子ども、したがって人間をも自己自身へ、彼の素質と能力の総体の発達と使用へ、彼の本質の認識と保育へ、偉大な宇宙全体および生命全体の結合と合一へ、また生命の源泉、生命の統一、それ自体善である神へ回

帰させる。植物界および樹木界およびその諸現象は、人間の生活のほとんどすべての面に渡って統一したり、人間に教訓を与えたり、警告を与えたり、要求したりしながら、人間を助けているが、とりわけ神と合一させながら人間を助けている。

人間は、妨げられない、濁りのない、真の「神・自然および人類との合一」において彼がなるべきものになることができるという目覚まされた予感をもって、今や、成熟した少年および少女は媒介学校、あるいは人々が呼びたいれば「基礎学校 (Begründungsschule)」から「教授と思考の学校 (die Lehr- und Denkschule)」に入学すべきである、とフレーベルは主張する⁴⁴。彼らはのちに再びこの学校を卒業し、そして「職業と生活の学校 (die Berufs- und Lebensschule)」に入る⁴⁵。

3 媒介学校論の思想的背景

ハイラントは、フレーベルが、ペスタロッチーにおける基礎陶冶による人間教育を一生追求し続けた点に注目する⁴⁶。ペスタロッチーの基礎陶冶は、カイルハウでの「基礎づける教授」ないし「基礎的教授」に継承されることになる。「ヘルバ・プラン」も基本的に「基礎づける教授」を継承している。「ヘルバ・プラン」には、「基礎づける教授」と、科学的教授としての「継続する教授」が混在している点も認められるが、「継続する教授」は、教授計画理論の断片に留まっていた。「ブルクドルフ・プラン」における基礎学校の教授内容も、基本的に「基礎づける教授」の教科課程と一致するものが多い。このように、フレーベルのカイルハウでの教育学、ヘルバおよびブルクドルフでの国民教育施設の計画においても、教授内容は基本的にカイルハウでの「基礎づける教授」である。フレーベルの「基礎づける教授」は、ペスタロッチーの基礎陶冶を継承したものである。ペスタロッチーの基礎陶冶は、子どもものの内部の純真な力へ働きかけるものであり、家庭教育と初等教育に連続性を持たせる陶冶である。ハイラントも指摘するように、フレーベルにおいては、ペスタロッチーと同様に、学校の教授は自覚的な家庭教育とほぼ同義に

置かれていた⁴⁷。つまり、フレーベルの学校構想は、常に家庭生活と学校生活の結合という観点を根底に持ち、家庭教育の延長上に考えられている。その意味において、フレーベルの学校構想は、媒介学校論に留まるものであり、その後の学習学校については、断片的にしか語られていないということになる。

したがって、フレーベルの『人間の教育』における学校教育学も、ヘルバおよびブルクドルフの国民教育施設の計画も、「基礎づける教授」を根底に置く媒介学校論と見ることが、妥当ではないかと思われる。仮に、フレーベルの学校教育学が媒介学校論の域を出ないものであるとするなら、彼が学習学校、あるいは教授と思考の学校における教授内容をどのように考えていたかは、彼の学校教育学から家庭教育や幼稚園教育における教育内容を取り去って残った教科内容によって、具体的には「ヘルバ・プラン」で断片的に語られている「継続する教授」あるいは「応用する教授」によって推察するしかないということになる。

ところで、媒介学校の考え方は、フレーベルが晩年に強調することになった「媒介の法則」に基づいていることは間違いない。フレーベルは、媒介の法則は、最も重要な宇宙全体の法則であり、人類の法則であり、生命の法則であると考えている⁴⁸。フレーベルによれば、「媒介の法則は、万物における根本法則であり、または見える世界と見えざる世界、精神的な世界と肉体的な世界における根本法則である。」⁴⁹

フレーベルは、あらゆる現象の第一の法則は、対立の法則であると考え、この法則は人間が子どもとして生まれると同時に人間を制約するものであると指摘している⁵⁰。しかし、対立の法則と同時に媒介の法則が与えられている。この媒介の法則は、対立物を媒介するものによって対立物は結合されるという思想であり、この法則は部分的全体の思想に基づいて成り立つとも考えられる。子どもは早くから、人類の一員として、全生命の一部として、つまり部分的全体として教育されなければならない⁵¹。すなわち、各々の個々の存在、個別存在は、一切の生命の部分的全体であり、同様に個別存在の発達の法則もまた世界全体、生命全体の発達の法則であるということである⁵²。

媒介の法則は、子どもの遊びの対象物に明確に現われている。すなわち、球と立方体は、まったく対立する形であるが、その両者を円筒が媒介するという考え方である。また言語は、人間と事物、人間の思考と行為とを媒介するので、明瞭に媒介の法則を表わしている⁵³。

フレーベルのこの教育方法は、統一や対立や媒介の認識から得られたものであるから、また融合の教育として、したがって協調の教育として現われる⁵⁴。このことは、健全な各家庭の中に生き生きと、美しく真実に現われるが、とりわけ父と母と子との中に、三位一体的な生命の法則として明瞭に現われている⁵⁵。

フレーベルは、教育は第一の根本法則・生命法則・存在法則、あるいは自然の法則および宇宙の法則に服従し、一つの確固とした点から出発しなければならないと考える⁵⁶。これらの法則やもちろんこの確固とした点は、神が万物を支配し、万物に神的なものが宿するという「球体法則（das sphärische Gesetz）」に基づく。したがって、発達に即して教育する陶冶の確固とした出発点から、さらに進んだ発展的な教育法則、すなわち対立の法則、部分的全体の法則、媒介の法則、三位一体の法則が流れ出てくる、とフレーベルは考える⁵⁷。

ところで、媒介学校論が、媒介の法則に基づき、幼稚園と本来の学習学校を媒介し結合するという考え方は、もう一つ別の観点から考えることができる。別の観点とは、母性と父性の関係である。

母親や保育者によって母性に基づく教育が行なわれる幼稚園から、教師によって父性に基づく教育が行なわれる本来の学習学校への媒介となるのが、媒介学校である。フレーベルは、カイルハウ学園での実践をもとに執筆した論文「わがドイツ民族に寄せる」では、神の強い父性を前提とし、教育の究極の目的は、宗教教育にあり、神との合一を実現することであると強調している⁵⁸。この考え方は変化してしまったわけではない。『人間の教育』における少年期の教育についても、フレーベルは、宗教教育や職業に関する教育における父親あるいは教師の役割の重要性を指摘し、乳児期、幼児期に比べる

と父親を尊重している。このことは、たとえば、「ブルクドルフ・プラン」における基礎学校の11歳から12歳までの第四段階の教授になって、聖書に基づく宗教教育を開始し、生徒を職業への意識へと向ける教育をすることと呼応している⁵⁹。つまり、媒介学校の次の段階では、宗教教育と職業教育の基礎を行なうことが根幹に据えられることになるのである。

キリスト教およびキリスト教に基づく厳格な家父長制が支配していた当時の父性原理社会の準備段階として学校構想を考えれば、本来の学習学校や職業学校の父性の強さと幼稚園の母性に基づく教育とを媒介し、両者を無理なく結合する学校がフレーベルには是非とも必要と考えられたにちがいない。つまり、母性に基づく教育と父性に基づく教育を結合するのが媒介学校の役割であると推察される。フレーベルの「基礎づける教授」は家庭生活と学校生活の結合という思想に基づくと考えられたが、そのように考えれば、「基礎づける教授」による媒介学校は、母性的なものと父性的なものが混在し、両者を媒介する要素を持っていたと考えることができる。フレーベルにおける媒介学校論は、幼稚園と学習学校の教育内容を媒介し、両者を無理なく結合するためだけのものではなく、母性によって愛情に包み込まれ庇護されてきた幼稚園から、厳格な父性原理社会において生活していくための準備段階である学習学校や職業学校への移行段階として、母性的なものと父性的なものを媒介し包含している学校構想と考えることができるのである。つまり、媒介学校の構想とは、母性に基づく教育から父性に基づく教育への移行段階として、母性的なものから脱皮し、父性的なものを受け入れ身につけるための訓練の場であると推察される。

むすび

フレーベルが晩年に提唱した媒介学校論は、幼稚園から本来の学習学校への移行段階であり、両者の要素を持ちながら、両者の本質を統合し、両者をつなぐものである。フレーベルは、幼稚園と本来の学習学校には質的な差があるので、どうしても両者をつなぐ段階が必要であるとの発想を持ったにち

がない。幼稚園では、直観による認識が重視されるのに対して、学習学校では思想による理解が求められる。つまり、媒介学校は、現実および事物の直観から抽象的・思考的な理解への移行段階を意味する。

ハイラントも指摘するように、フレーベルは、ペスタロッチーにおける基礎陶冶による人間教育を一生追求し続け、ペスタロッチーの基礎陶冶は、カイルハウでの「基礎づける教授」ないし「基礎的教授」に継承されている。「ヘルバ・プラン」における国民教育施設および「ブルクドルフ・プラン」における基礎学校も、基本的にカイルハウでの「基礎づける教授」を継承し、それを教授内容の基礎に置いている。媒介学校における教授内容も、基本的には、カイルハウでの「基礎づける教授」の域を出るものではない。その意味では、フレーベルの学校教育学は、「ヘルバ・プラン」で語られている「継続する教授」や「応用する教授」によって断片的に見られる学習学校ないし教授と思考の学校の教授内容を除くと、そのほとんどは「基礎づける教授」を根幹に据える媒介学校論だったのではないかと推察される。

ところで、媒介学校は、母性に基づく教育が行なわれる場である幼稚園と父性に基づく教育が行なわれる学習学校との媒介となっていると考えられる。母性によって庇護されている幼稚園から、厳格な父性原理社会への準備段階である学習学校への移行段階として、媒介学校は、母性的なものと父性的なものを合わせ持ち、生徒を自立させるために、母性による教育から父性による教育へと無理なく移行させるための教授内容を持っているのである。

媒介学校は、媒介の法則を根拠にしている。媒介の法則は、対立の法則を前提とし、対立物を媒介するものによって対立物は結合されるという思想である。球と立方体を媒介する円筒は、球と立方体の本質を統合し、両方を結合する。これと同じように、媒介学校は、幼稚園と本来の学習学校の本質を統合し、両者をつなぐ。

このような媒介の法則は、フレーベルにおける万物の第一原理である球体法則に包括されると考えられる。つまり、対立物の両者の本質を統合するのが媒介の法則の意味であるとするなら、その対立物も媒介も包括するのが球

体法則だからである。それゆえ、球体法則は、神の強い父性を前提とするキリスト教を根拠としつつも、父性と母性を媒介し、父性と母性を包括する性格を有していると考えることができよう。

注

- 1 F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg.v.W.Lange, Abt.2, 1862 u.1874, 1966, S.501. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第五卷（「続幼稚園教育学」・「母の歌と愛撫の歌」）玉川大学出版部、1981年、「続幼稚園教育学」、170頁。
- 2 ibid.,S.501-522.同上訳書、「続幼稚園教育学」、169-203頁。
- 3 Vgl.F.Fröbel, Ausgewählte Schriften,Bd.2.Die Menschenerziehung, Hrsg.v.E.Hoffmann. (Pädagogische Texte, Hrsg.v.W.Flitner), Stuttgart:Klett-Cotta, 4.Aufl.1982, S.152-221. フレーベル、荒井武訳『人間の教育（下）』岩波書店、1964年、20-173頁、参照。
- 4 Vgl.ibid.,S.221-251.同上訳書、173-238頁、参照。
- 5 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部、1999年、149頁。
- 6 同上書、149頁。
- 7 F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.2, a.a.O., S.517. 前掲、『フレーベル全集』第五卷、「続幼稚園教育学」、195頁。
- 8 ibid.,S.518.同上訳書、「続幼稚園教育学」、195頁。
- 9 Vgl.F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg.v.W.Lange, Abt.1, Bd.1, 1862, 1966, S.403.
- 10 ibid.,S.408.
- 11 Vgl.H.Heiland, Die Schulpädagogik Friedrich Fröbels, Georg Olms Verlag AG, Hildesheim 1993, S.113.
- 12 ibid.,S.114.
- 13 Vgl.ibid.,S.116.
- 14 Vgl.ibid.,S.152.
- 15 Vgl.F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a.O., S.479. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第三卷（教育論文集）玉川大学出版部、1977年、198-199頁、参照。
- 16 Vgl.H.Heiland, Die Schulpädagogik Friedrich Fröbels, a.a.O., S.139.
- 17 小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1994年、254-255頁、参照。
- 18 Vgl.F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.2, a.a.O., S.501. 前掲、『フレ

ーベル全集』第五巻、「続幼稚園教育学」、170-171頁、参照。

- 19 Vgl. ibid., S.501-502. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、170-171頁、参照。
- 20 ibid., S.502. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、171頁。
- 21 Vgl. ibid., S.502. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、171-172頁、参照。
- 22 ibid., S.503. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、172頁。
- 23 Vgl. ibid., S.503. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、172-173頁、参照。
- 24 ibid., S.503. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、173頁。
- 25 ibid., S.503-504. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、173頁。
- 26 ibid., S.504. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、175頁。
- 27 ibid., S.505. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、176頁。
- 28 Vgl. ibid., S.505-506. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、176頁、参照。
- 29 Vgl. ibid., S.506. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、176-177頁、参照。
- 30 ibid., S.506. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、177頁。
- 31 ibid., S.506.
- 32 ibid., S.506-507. 前掲、『フレーベル全集』第五巻、「続幼稚園教育学」、177-178頁。
- 33 ibid., S.507.
- 34 ibid., S.507. 前掲、『フレーベル全集』第五巻、「続幼稚園教育学」、178頁。
- 35 Vgl. ibid., S.507. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、179頁、参照。
- 36 ibid., S.509.
- 37 ibid., S.509.
- 38 ibid., S.515.
- 39 ibid., S.515. 前掲、『フレーベル全集』第五巻、「続幼稚園教育学」、190-191頁。
- 40 ibid., S.515. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、191頁。
- 41 ibid., S.516. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、192頁。
- 42 ibid., S.516-518. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、193-196頁。
- 43 Vgl. ibid., S.519. 同上訳書、「続幼稚園教育学」、197-198頁、参照。
- 44 ibid., S.520.
- 45 ibid., S.520.
- 46 H. Heiland, Die Schulpädagogik Friedrich Fröbels, a.a.O., S.152.
- 47 Vgl. ibid., S.152.
- 48 Vgl. F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt. 2, a.a.O., S.264. 小原國芳・莊司雅子監修『フレーベル全集』第四巻（幼稚園教育学）玉川大学出版部、1981年、531頁、参照。
- 49 ibid., S.337. 同上訳書、654頁。
- 50 Vgl. ibid., S.340-341. 同上訳書、658-659頁、参照。
- 51 Vgl. ibid., S.324. S.333. 同上訳書、632-633頁、647頁、参照。

- 52 *ibid.*, S.333.同上訳書、647頁。
- 53 *Vgl. ibid.*, S.358.同上訳書、655頁、参照。
- 54 *ibid.*, S.342.同上訳書、660-661頁。
- 55 *ibid.*, S.342.同上訳書、661頁。
- 56 *ibid.*, S.346.同上訳書、667頁。
- 57 *ibid.*, S.346.同上訳書、667頁。
- 58 *Vgl. F. Fröbel, An unser deutsches Volk, in: F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a.O.*
- 59 *Vgl. F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a.O., S.507.*

Summary

A Study of the Conception of “Vermittelungsschule” in Fröbel’s Pedagogy
——From the Viewpoint of Connection of Kindergarten with Learning School——

Seikō Toyozumi

Fröbel’s pedagogy develops from the conception of school to the education of kindergarten and always has the thought of connection of home with school in the basis. His pedagogy has the thought how he connects home life or the education of kindergarten and the instruction of school. Especially in his last years he has the conception of “Vermittelungsschule” to connect kindergarten and true learning school.

In this paper first I study the conception of “Vermittelungsschule” in Fröbel’s school pedagogy. Secondly I study the conception of “Vermittelungsschule” in the letter which Fröbel wrote in 1852. Thirdly I study Fröbel’s background of the thought of “Vermittelungsschule”. I study if Fröbel’s school pedagogy means basically the conception of “Vermittelungsschule”, if the conception of “Vermittelungsschule” is based on “Vermittelungsgesetz”, and if the conception of “Vermittelungsschule” is related to Fröbel’s thought of maternity and paternity. Accordingly, the purpose of this paper is to study which significance Fröbel’s conception of “Vermittelungsschule” has in his pedagogy.